

## 国あげてインド重視を

小川 忠 国際交流基金 日本研究・知的交流部長

年明けに米ワシントンに出張し、政府、議会、シンクタンク関係者の声を聴く機会があった。そこで感じたのは米国の政策形成にかかわっている人々の間で、インドの存在感が着実に高まっていることだ。

それはインドが国力増大に伴い日本、中国と並ぶ主要なプレーヤーとして台頭してきているという国際社会の構造的変化の反映でもある。同時に、米国内におけるインド系米人の活躍というファクターも見逃せない。

発言力を増すインド系米人の代表格が、ルイジアナ州のジンダル知事であろう。移民2世の彼は、インド系では初めて州知事に当選し、今や共和党のホープとして将来の大統領候補という声もあがっている。

インド系米人の数は257万人。従来カースト意識が障壁となってインド系移民は結集を欠き発言力をもちえなかった。ところが世代交代が進み、カースト意識に縛られない米国育ちの2世、3世が、インターネットを駆使して人的ネットワークをはりめぐらし強力なロビー組織を作りあげた。近年ワシントンの議会やシンクタンクなどでの米印交流の旗振り役は彼らだ。

さらにインドから米国に留学し、そのまま米国で教職を得た研究者たちの存在も重要である。米国の大学で学ぶインドからの留学生数は、約10万人。インドは米国への最大の留学生送り出し国であり、そのなかから優秀な人材が米国の知的世界に組み入れられていく。現在米国内の研究機関で現代インド研究を支えているのは彼らである。

米印交流は、このようなグローバル化がもたらした人的資源の広がりの上で拡大している。ひるがえると、日本とインドの対話は米印と比べて大きく立ち遅れているといわざるをえない。日印交流を担う人材基盤の規模があまりに小さすぎるのだ。

外国人登録をしている在日インド人の数は2・2万人、米国のインド系コミュニティーの100分の1以下だ。日本の大学で学ぶインド人留学生数にいたっては543人と、在米インド人留学生数の200分の1程度に過ぎない。

インドにおいて、将来の知日層のすそ野を形成する日本語学習者数の推移をみえると、06年調査で1・1万人、10年前比で2・7倍の増加を示しているが、世界的に日本語学習は拡大傾向にあり、日本語学習者の規模において中国の68万人、韓国の91万人と比べて、かなり見劣りする。

日本が、複雑な力学が交錯する国際社会のなかで生きていくためには、インドとの連携は不可欠である。日印関係を抜本的に強化しなければならない。そのための基礎作業として、「古代から変わらぬ悠久のインド」という従来のイメージをこえて、現代インドのダイナミズムを深く理解するための研究強化が重要となってこよう。

日本の大学、研究機関におけるインド研究は哲学や仏教研究が中心で、この分野でも研究レベルは世界のトップクラスにあるが、現代インドの政治、経済、法律などを専攻する研究者数は限られている。社会科学系インド研究の常勤ポストは無いに等しく、そのためこの分野の若手研究者は将来展望がない不安定な立場におかれている。

昨年から人間文化研究機構と京大はじめ六つの期間がネットワークを形成して、本格的な現代インド地域研究を開始している。とはいえ欧米とインドとの研究交流の質量に比べまだまだ不十分といわざるをえない。恒常的な現代・インド研究交流の質量に比べまだまだ不十分といわざるをえない。恒常的な現代・インド研究体制の整備、留学生交流の拡充、専門家間の対話や市民交流の推進など国をあげた取り組みが必要だ。

(筆者は元国際交流基金ニューデリー事務所長。本稿は2010年2月4日付毎日新聞に掲載された。)

2010年 03月 02日

日本英語交流連盟 『日本からの意見』  
<http://www.esuj.gr.jp/jitow/jp/>